

大栗紙工株式会社

普通のノートが使いづらい方もいる
多くの声をもとにオリジナルノートを開発

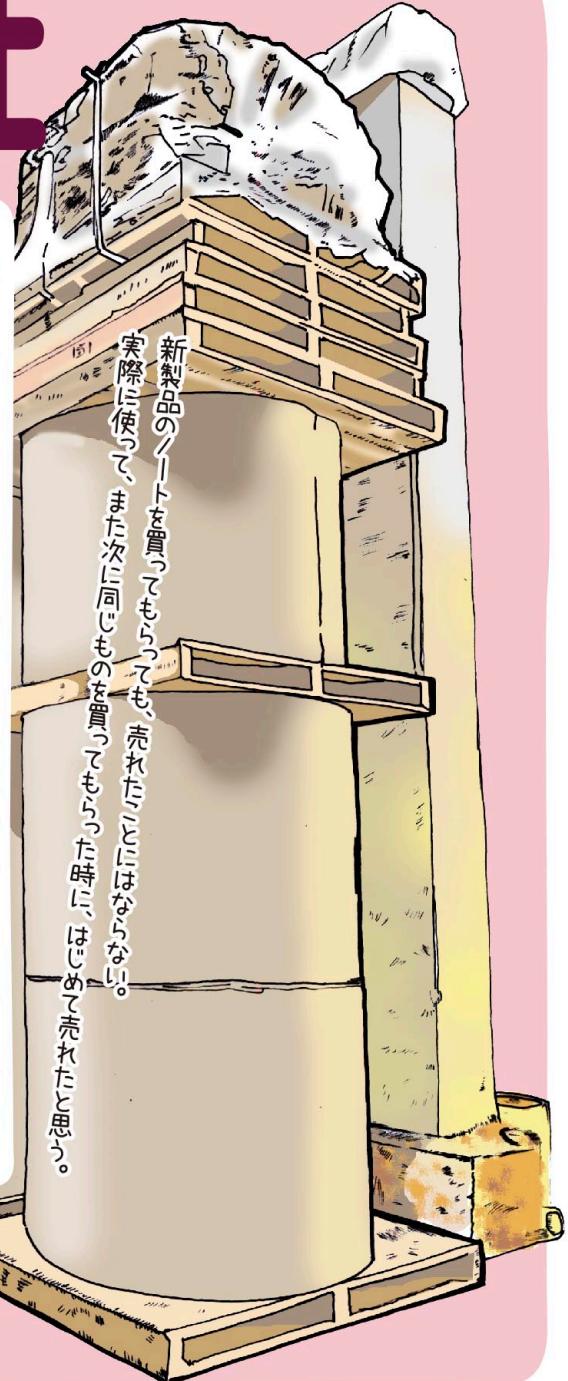


自社ブランドのノート「mahora」を作ろうと思ったのは、発達障がいの団体を支援されている方から、普通のノートでは障がいを抱えている方は使いづらいということでした。健常者では気にならない余白部分の数字、飾り、線の色や細さなどが気になってしまい、使いづらいことも。これまで、品質を守り続け安定した生産を心がけ、多くの方に利用されているノートが、人によっては使いづらいこともあるのだと思いました。

発達障がいの方にとって使いやすいとはどういうことかを知るために、約100名の方にアンケートを実施。ノートの白い紙がまぶしすぎる、行間の線が薄くて文字が行をはみ出てしまう、線以外のものが気になってしまいなど、様々な意見が聞かれました。その意見を参考に製本サンプルを作成。改良を重ね、最終的に2種類のノートを作成。自分たちの意見が取り入れられ形になったと、協力してくれた方も喜んでくれました。

ある日、発達障がいのお子様をもつお母様から、このノートを見て、自分は子どもにどんな思いで接しているか、正直で切実な思いをメールでいただいたんです。そのような方に届けられるノートを作つてよかったですと思っています。少子化で今後、ノートの販売数は減少すると思いますが、世の中に必要とされるものを作る努力は続けていきます。

高さ3mを超える巨大な紙のロール。
これがノートの材料。生産量は1日10スケ。



手書き帳簿からノートに移行 年間 2700 万冊を製造する

年間 2700 万冊ものノートを製造している大栗紙工。昭和初期に創業した当時は、企業の金銭の出入りを記入する帳簿を製造していた。時代とともに帳簿からノートへと転換。当初、他社は A5 サイズを製造していたが、同社は B5 サイズノートを製造。A5 に比べてサイズが大きく、生産効率は低くなるので、やりたがらない会社が多い中、同社は若手社員を中心にした B5 専門部隊を設立。世の中のニーズの高まりもあり、事業は活況になった。

1976(昭和 51)年に同社は大きな転機を迎える。現社長の父である先代が、糊でとじる機械を約 1 億円かけて導入。それまで、ノートは紙を糸でとじて作っていたが、糊でとめる無線とじを可能にした。国産の機械で当時としては非常に高額で扱ったこともない機械にチャレンジする先代の姿勢に誰もが圧倒されたそう。内情は大変だったが、次第に販売量も増加。朝から晩まで作っても、供給が追いつかない状態になると、機械を 3 台に増設。さらに、A4 やメモ用の小さなサイズとバリエーションも増やしていく。

ノート製造において、中面の線の印刷はとても重要で難しい。細く薄い線を印刷するには、微妙なインク調整が必要。ほんの一部分でも印刷できていないミスが起れば、そのノートは不良品になってしまう。そこで同社では、朝イチに機械を作動させると、実際に印刷したものを 30 分かけて人の目でチェック。さらに、機械によるエラーチェックも行っている。

2019 年に新たなチャレンジとして自社ブランド「OGUNO」を立ち上げた。「mahora(まほら)」とネーミングされた 2 種類のノートは、もともと発達障がいの方が使いやすいノートを、と開発したものだったが、デザイン性の高さから、2020 年 2 月下旬の発売以来、発達障がいの方だけでなく一般にも人気を集めている。ノート作りへの技術力や愛情が、オリジナルノートという形に発展し、世の中に必要とされ世の中の役に立っている。今後も、安定品質でのノート作りと並行して、新しい挑戦を続けていくそうだ。

我が社の 自慢

カンボジアの 子どもたちの教育支援

社内の自動販売機で、100 円で「ドリンクを買えば 5 円をカンボジアの教育支援を行なう団体「シーセフ」に寄付される。その寄付金で作られた、小・中・高一貫校が設立され、現地まで見学に。日本語教育に使う学習帳も寄贈した。

当社が B5 サイズノートの製造は A5
に比べてサイズが大きめで、
生産効率も低くなるのでみんな敬遠しました。

「mahora」は、素晴らしい場所という意味の
「まほらば」の大和言葉である「まほら」に由来。
ノートを使う場所、時間が心地良い
素晴らしいものになってほしいという
想いを込めた。

大栗紙工株式会社

<http://og-shiko.co.jp/>
〒544-0004 大阪市生野区巽北3-15-7
TEL 06-6752-0856 FAX 06-6754-1862
事業内容／無線とじノートの製造、電解水生成装置の販売